

第4章 防災訓練実施種目

1 消火器の取り扱い訓練

訓練の目的

消火器の使い方を覚えて、火災の初期に消火活動を安全に実施できるようにする。

準備するもの

- 訓練用水消火器又は消火器（実物）
- 標的（火元の代わりになるもの）



消火器の取り扱い訓練の実施方法の例

- ① 訓練用水消火器又は消火器（実物）を準備する。
（訓練用水消火器については、消防署で貸出しを行っています。消火器の取り扱い訓練を行うときは、事前に最寄りの消防署・分署にお問い合わせください。）
↓
- ② 標的を準備する。
（火元とみため、消火器を噴射するものとなるものです。カラーコーンを使うことが多いです。お近くにカラーコーンなどがいない場合は、木やポールなどを標的としてください。）
↓
- ③ 消火器の取り扱い手順を説明する。
↓
- ④ 実際に消火器を取り扱う。
（実物の消火器を準備して訓練を行う場合は、実際の使用を省略しても構いません。）
↓
- ⑤ 消火器本体に関する説明や実際に消火器を取り扱った上での補足説明等を行う。
↓
- ⑥ 質疑応答を行う。

消火器の取り扱い方法

まず、火災を発見したら大きな声で「火事だ～」と周囲の人に知らせてください。
 そして、消火器を火災の発生している場所の安全な所まで運んでください。
 消火器の使用法はとても簡単で、「1・2・3」の3つの動作で行うことができます。

①安全栓を引き抜く



消火器の上に黄色い「安全栓」があります。これを上に引き抜くことで栓が抜けます。

②ノズルを火元に向ける



- ・ノズル（ホース）を止め金具から外して火元に向けてください。
- ・ノズルの先端をしっかり握ってください。

③レバーを握り薬剤を出す



- ・レバーをしっかり握ると、薬剤が勢いよく出ます。
- ・手前からほうきで掃くようにして、燃えているものを覆ってください。

以上が消火器の使い方です。「1、2、3」で覚えてください。
 忘れてしまった場合は、消火器の本体にも使用方法が表示されていますので確認してください。

注意事項

《 屋外で使用する場合 》

必ず風上から風下に向けて使用してください。風下は、煙や炎が自分に向かってくるので危険です。また、薬剤を出しても風で自分の方へ戻ってきてしまい、炎に薬剤がかかりにくいです。

《 屋内で使用する場合 》

必ず避難路を確保してください。部屋の中で消火器を使うと、煙や薬剤で周りが見えなくなってしまう可能性があります。逃げるためのドアを背中にして消火器を使い、危険を感じた時はすぐに逃げられるようにしてください。

《 火元に近づきすぎない 》

火元の近くで薬剤を出すと自分の方に炎が吹き返してきたり、てんぷら鍋から火が出た場合は、油が飛び散ったりして危険です。放射距離を確認し、離れた所から薬剤を出して、少しずつ近づいていってください。

《 燃えている物をねらう 》

どうしても燃え盛る炎に目がいきつてしまいますが、燃えている物に薬剤をかけなくては火は消えません。

《 消火器で消せる範囲は 》

炎が天井にとどきそうになっていれば、消火器での消火は困難です。
 すぐに避難してください。

消火器本体の説明

現在、出回っている消火器は「粉末消火器」と言われる物がほとんどで、中には粉末の薬剤が入っています。

消火器で消せる火災の種類



- 白色の丸：普通火災用（木、布、紙など）
- 黄色の丸：油火災用（てんぷら油、石油ストーブなど）
- 青色の丸：電気火災用（コンセント、電気器具など）

それぞれ消火できる火災の種類を表しています。
3つが表示されていれば、一般家庭で起こる火災のすべてに対応できるということです。

消火器本体の種類

消火器には「圧力計（メーター）が付いている消火器（蓄圧式消火器）」と「圧力計（メーター）が付いていない消火器（加圧式消火器）」があります。



【蓄圧式消火器】

- ・常時容器内に一定の圧力がかかっている消火器のことを言います。
- ・握ったレバーを離すと、薬剤は止まります。
- ・常時容器内の圧力が確認できます。

【加圧式消火器】

- ・消火器を使用する際に、容器内を加圧する仕組みの消火器のことを言います。
- ・握ったレバーを離しても薬剤は止まりません。

【ポイント】

- ・どの種類の消火器でも薬剤が出なくなるまで消火作業を実施することが望まれますが、身の危険を感じたら避難してください。
- ・消火器は1度レバーを握ったものは、薬剤が残っていても再度使用するのは危険です。使用後は業者に依頼するか、販売店にて新しいものを購入してください。

消火器 Q&A

Q 期限切れ、使用済みの消火器の処分はどうすればいいですか？

A 不燃物として出すことはできません。長野市ホームページに「消火器の出し方」が掲載されています。長野市ホームページの検索コーナーで「消火器」と検索し、ご確認ください。

また、消火器を購入する際は、業者が古い消火器を引き取ってくれる可能性がありますので、購入する業者に相談してください。

Q 消火器をどこで購入すればいいですか？

A 消火器は、ホームセンターや消防設備業者で購入できます。

お近くのホームセンターで購入するか、消防用設備の業者は、インターネットやハローページ（50音別電話帳）で「消防用設備」と検索すると載っているので参考にしてください。

なお、消防署で消火器の訪問販売はしていません。怪しいと思ったら勇気をもって断ってください。

Q 消火器を設置する必要はありますか？

A 一般住宅に消火器を設置する義務はありません。しかし、万一出火した場合に、どのように消火しますか？ 消火器があれば小さな火を簡単に消すことができるので、ご自宅に消火器を設置することをお勧めします。

Q 消火器はどこに置いておけばよいですか？

A 火を使う場所の近くがよいですが、近すぎると、万一出火した場合に熱くて近寄れません。簡単に取りに行ける場所にしてください。また、湿度の高い場所、常時水や直射日光にあたる場所に置くことは避けてください。このような場所に消火器を置くことにより、主に底の部分等から腐食が発生します。腐食が発生した消火器を実際に使用した際に、消火器が破裂シケガをする等の事故が発生しています。このような事故を避けるために、設置場所に注意するとともに日頃から消火器の外観を点検しておくことが大切です。

Q どの種類・どの大きさの消火器を購入したら良いですか？

A 消火器には、住宅用消火器と業務用消火器があります。住宅用消火器は小型で色の規制がないのでカラフルな製品も販売されているのが特徴です。どちらを購入しても問題はありません。

消火器には、「粉末系」「水系」「ガス系」があり、それぞれ特徴があるので、目的に合った消火器を購入することをお勧めします。消火器本体に消火できる火災の種類が表示されています。

大きさは、大きい消火器の方が薬剤がたくさん入っているので消火する能力は高いですが、重くなります。自分の使いやすい大きさを購入することをお勧めします。

Q 消火器はどのくらいの時間薬剤を出すことができますか？

A 消火器の種類や大きさにより異なりますが、一般的な粉末消火器は、10秒から15秒程度です。

Q 消火器の寿命は？

A 消火器には使用期限があります。種類によって異なりますが、短い物で5年、長い物で10年となっている場合が多いです。消火器本体に記載してありますので、ご自宅の消火器を確認してみてください。

2 消火栓の取り扱い訓練

訓練の目的

- 火災が発生した場合に、自主防災組織が中心となって消火活動を行うための方法を習得する。
- 地域内の消火栓の位置や初期消火用具箱の設置場所を確認する。

準備するもの

- 地上式消火栓 □初期消火用具一式
(設置してある場所で訓練を実施します。)



消火栓の取り扱い訓練の実施方法の例

- ①訓練で使用する消火栓の場所を決める。
(消火栓の取り扱い訓練を行う場合は、最寄りの消防署・分署にお問い合わせの上実施してください。消火栓から実際に水を出すと、赤水(水道水が赤く濁る現象)が発生するなど、周辺住民宅に大きな影響を及ぼす可能性があるため、訓練での取り扱いに関しては、原則として実際に水を出さないよう、お話をさせていただいております。)
- ↓
- ②初期消火用具箱内の資機材の説明、消火栓の取り扱い方法について説明する。
- ↓
- ③ホースの延長方法、ホースと消火栓の結合方法、ホースとノズル(筒先・管槍)の結合方法を確認する。
- ↓
- ④消火栓の取り扱い方法を一連の流れで確認する。
- ↓
- ⑤実際に消火栓を取り扱った上での補足説明等を行う。
- ↓
- ⑥訓練の振り返りを行う。

初期消火用具箱内の資機材



《初期消火用具一式》

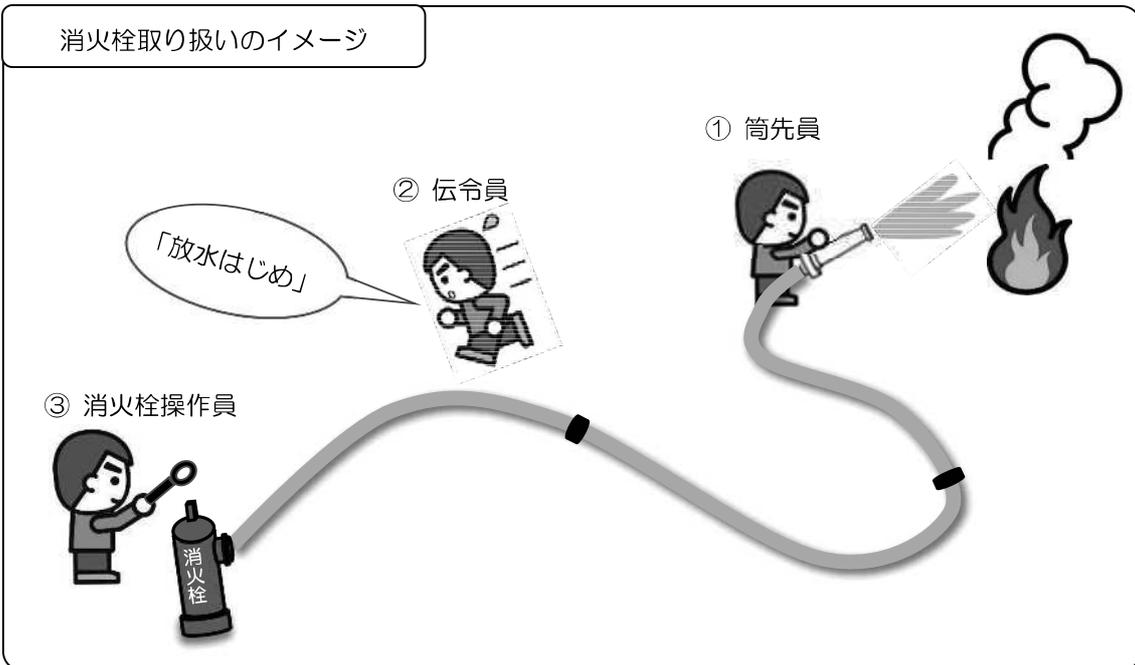
- 65 mmホース
2本～3本
(1本 20m)
- 消火栓開閉器
- ノズル (筒先・管槍)

消火栓を使用した初期消火の方法

消火栓の取り扱いは、3人以上で行います。役割分担を明確にすることが大切です。

- ① 筒先員 (ホースを延長し、筒先を保持し消火活動を行います。)
- ② 伝令員 (ホースを延長し、「放水はじめ」「放水やめ」の伝令、筒先員の補助を行います。)
- ③ 消火栓操作員 (消火栓を操作して水を出したり、止めたりします。)

消火栓取り扱いのイメージ



① 筒先員

「筒先員」を担当する人は、先端のホースを延長し、筒先をホースに結合、全てのホースが結合され、放水の準備ができたなら伝令員に「放水はじめ」と伝えます。

その後、水が筒先から出たら消火活動を実施します。（放水を止める時は、伝令員に「放水やめ」と伝えます。）

①ホースを延長する



- 火点の近くまでホースを持っていき、先端のホースを延長する。

②筒先をホースに結合する



- オス金具を足で起こした状態で、筒先を押し込む。
- 筒先をホースに結合したら筒先を引っ張り結合の確認をする。

③筒先を構える



- 放水の準備ができたなら筒先を構えて、伝令員に「放水はじめ」と伝える。
- 水が出たら消火活動を行う。

② 伝令員

「伝令員」を担当する人は、必要なホースを延長し、筒先員の準備が整い「放水はじめ」の指示があったら、消火栓の操作員に「放水はじめ」を伝えます。

その後、筒先員の後ろでホースを持って放水活動の補助を行います。（放水を止める時は、「放水やめ」の指示を伝令します。）

①ホースを延長する



- オス金具を持って火点までホースを延ばす。
- ホースに「ねじれ」や「折曲がり」がないように注意する。

②ホースを結合する

オス金具

メス金具



- オス金具を足で起こした状態で、メス金具を押し込む。
- 「ガチャン」と音がして結合できたら、保持しているホースを引っ張り、外れないことを確認する。（しっかり結合できていないと外れてしまいます。）

③ 消火栓の操作員

「消火栓操作」を担当する人は、放口キャップを外し、ゆっくり開閉栓を開け、消火栓から水が出ることを確認します。

その後ホースを結合し、伝令員の「放水はじめ」の伝令で消火栓の開閉栓を回して放水を開始します。（放水を止める場合は、「放水やめ」の伝令があります。）

①放口キャップを外す	②水が出るか確認	③ホースを結合する	④放水開始する
 <p data-bbox="252 913 363 943">放口キャップ</p> <p data-bbox="252 972 480 1088">消火栓開閉器を使うと回ります。（反時計回り）</p>  <p data-bbox="288 1173 443 1202">消火栓開閉器</p>	 <p data-bbox="549 913 628 943">開閉栓</p> <ul data-bbox="533 972 791 1485" style="list-style-type: none"> • 消火栓開閉器を使って開閉栓を回して、水が出るか確認する。 • 水を出したら一旦止める。 • 消火栓の中に異物（ゴミ・石）が入っている場合があるので、全ての異物が出たのを確認してからホースを結合する。 	 <p data-bbox="852 898 948 927">メス金具</p> <ul data-bbox="826 965 1082 1211" style="list-style-type: none"> • メス金具を「ガチャン」と音がするまで押し込む。 • ホースを引っ張り外れないことを確認する。 	 <ul data-bbox="1139 981 1353 1182" style="list-style-type: none"> • 伝令員の「放水はじめ」の指示があったら、ゆっくり消火栓の開閉栓を回す。

注意事項

- 筒先から水が出始めると反動で筒先が後ろに引っ張られますが、筒先を離してしまうと危険ですので、絶対に離さないようにしてください。
- 水が出ている状態で筒先を離してしまうと筒先が暴れて怪我をする恐れがあるので、人数に余裕があれば2人以上で筒先を保持してください。
- 地区に設置してある初期消火用具箱のホースが、どの家まで届くのか訓練を通じて把握しておくことも必要です。

救出訓練

3 救出訓練

訓練の目的

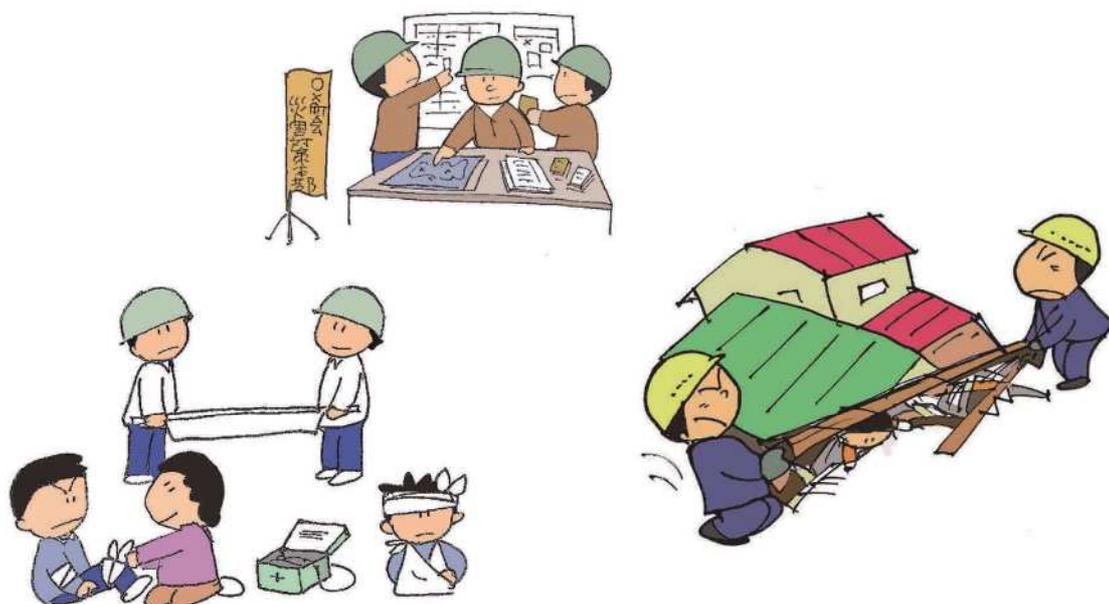
- ・簡易救助器具の取扱い方法を確認する。
- ・倒壊建物等の下敷きになった人を、簡易救助器具を使って救出する方法を確認する。

準備するもの

- 簡易救助器具（のこぎり、パール、ジャッキ、ハンマー等） □角材 □ベニヤ板
- 負傷者役のダミー人形（消防署や分署に、ご相談ください）

救出訓練の実施方法の例

- ①角材やベニヤ板、木製パレット等で、倒壊した建物をつくり、中にダミー人形を入れる。
- ↓
- ②倒壊建物の中にいる負傷者（ダミー人形）に、声をかけ安心させ、状況を聞く。
- ↓
- ③パールなどを使って負傷者（ダミー人形）の上にある倒壊物を持ち上げる。
- ↓
- ④できた空間に角材等を入れて支える。
- ↓
- ⑤④を繰り返し、負傷者（ダミー人形）を外に出せるようになったら救出する。



状況に応じた救出方法

地域内で救出が必要な人がいる場合は、まず、消防機関に場所と状況を通報します。通報と並行して、救出・救護班は救出用の資器材を持って現場に向かいます。

現場に到着したら、負傷者に声をかけ安心感を与えたとともに、負傷者がいる場所を確認し、その状況に応じて、できる限り大勢ですばやく救出を行ってください。なお、余震等による倒壊や落下物等には十分に気を付けましょう。その際、周囲の危険が無いかを確認する安全管理員を配置することも重要です。

各状況に応じて、次に示す要領に従って救出を実施してください。

【倒壊家屋からの救出】

○屋根を壊す

- ・転倒防止のため、強度を確認しながら作業を行う。
- ・バールや斧で瓦ぶき、トタンなどの屋根部分を引きはがし、斧を使って打ち割るか、ノコギリで切断する。
- ・屋根瓦を取り除く場合は、地上で作業している人に当たらないよう、監視員を付けて作業する。
- ・閉じ込められている人の近くを破壊する場合は、内部を確認しながら作業を行う。

○モルタル壁を壊す

- ・ハンマー等でモルタルを壊し、鉄網を鉄線鋏又はペンチで切断する。
- ・作業中は、モルタル等の破片が飛び散るので、眼鏡等をかける。
- ・レンガ造、ブロック造は、一部の破壊で他の部分が一気に崩れやすくなるため、注意する。

【人の上に大きな物が覆い被さっている場合の救出（梁、ブロック塀、自動販売機等）】

- ・上に乗っているものをできる限り取り除いたり一部を破壊したりして、少しでも軽くする。
- ・てこ（角材や鉄パイプ等）を利用して持ち上げ隙間を作り、できた空間を角材等で補強する。
- ・隙間があれば、自動車のジャッキを使って持ち上げる。

【閉じ込められた車内からの救出】

- ・火災の発生に備え、消火が出来る準備をする。
- ・車両の変形でドアが開かないときは、窓ガラスをバール等で割る。
- ・わずかな変形の場合は、バール等でこじ開ける。
- ・ドアが開いたら、座席を後部に下げて救出するための空間を確保し、シートを倒して救出する。

【高いところからの救出】

- ・窓等にハシゴをかけ、両側を2人で押さえて、ハシゴがぐらつかないようにする。

救出訓練

【ドア等に挟まれている場合の救出】

- ・挟まれている部分の隙間をバール等で広げる。
- ・広げてできた隙間にクサビ等を入れながら、徐々に広げる。
- ・木造のドア等、取付け構造が簡単なものについては、解体して救出する。

【長時間、暗闇に閉じ込められていた場合の救出】

- ・長時間暗い場所にいた負傷者を救出する場合は、直接強い光を浴びさせないように薄暗い場所に移動する。
- ・移動するときには、タオル等で目を隠し徐々に光に慣らすようにする。

【土砂崩れからの救出】

- ・作業分担（掘り起こす人・土砂を運び出す人など）を決め、作業監視員を付け、余震や土砂崩れに注意しながら救出作業を行う。
- ・タンスの引き出し、バケツ、毛布等を活用して掘り起こした土砂を運び出す。
- ・スコップ等を使用する場合は、被災者を傷つけないよう、細心の注意を払う。
- ・作業中に、きしみ音が聞こえた場合は、迷わず退避する。
- ・早期に大型バックホーなどの建設機械を要請する。

救出活動で使用する資器材

○救助用バール

倒壊・落下した障害物をこの原理で持ち上げたり、先端部を使ってドアの隙間をこじ開けるなどに活用する。



○ジャッキ類

倒壊した梁や積み重なった家具などの重量物を押し上げ、隙間を広げるのに活用する。



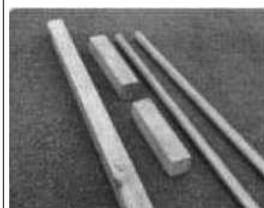
○スコップ・のこぎり・かなづち

がれき、土砂、作業の妨げになる物を取り除いたり、破壊したりする。



○てこに使う柱・角材・鉄パイプ

てこに使う柱は太さ10cm以上の物で、亀裂が入っていない丈夫な物を使う。鉄パイプは、太さ5cm以上で長さ2~3m程度の物を使う。



○はしご・ロープ

高所からの救出や物の引っ張り・固定等に使う。



※各地区の消防団詰所や器具置場に上記の資器材等を含む、簡易救助器具を配置しておりますので、災害時に、有効に活用してください。

4 災害図上訓練(DIG)

訓練の目的

1 災害を知る

「どこで、どれくらいの規模で、どのような災害の発生が予想されるか」

自分の暮らす地域で起こりえる災害を認識し、地図に書き込みをすることで、具体的に災害をイメージできます。

2 まちを知る

- ・「まちの構造はどうなっているのか」
- ・「災害時に安全な場所、危険な場所はどこにあるのか」
- ・「何かあった場合にお世話になる場所や施設はどこにあるか」

地図に具体的な要素を加えていくことで、自分達の地域の特徴を改めて確認することができます。

3 ひとを知る

- ・「いざという時に頼りになる人はどこにいるのか」
- ・「近所に手助けが必要な人はいないか」

人の情報は、地域または子供達にとって非常に重要な情報になります。さらに、参加者全員で防災について話し合うこと自体も、地域の防災ネットワークの構築につながります。

準備するもの

- 白地図 透明シート（地図上に敷き、書き込みをする） 油性ペン（地図書き込み用）
- 付箋 模造紙（意見の整理用等） 丸シール 各種ハザードマップ

※災害図上訓練DIGに必要な備品の一部は、消防署等で貸し出しを行うことができます。

災害図上訓練DIGとは？

DIG(ディグ)とは、災害(Disaster)のD、想像力(Imagination)のI、ゲーム(Game)のGの頭文字を取って名づけられた、誰でも行うことができる参加型で簡単な災害図上訓練です。

何をする訓練なの？

地元の地図を広げ、防災上の安全な場所や危険な場所はどこか、参加者全員で気軽に話し合いながら地図に書き込み、知識を共有します。そして、その結果から地域の特徴を把握し、課題を明確にします。



災害に強い地域を育てる

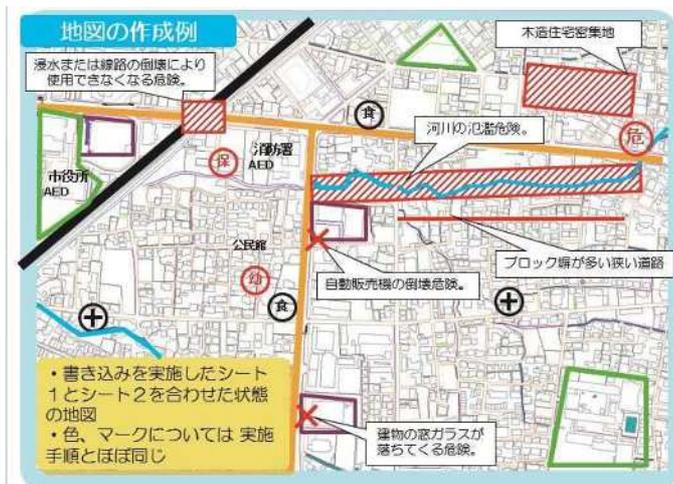
地図に書き込んだ情報（危険な場所、避難所、被害の想定など）を基に、どのように避難誘導をするか、負傷者が出た場合にどうやって助けるか、これらの行動にはどのくらいの人員が必要かを話し合っ



自主防災組織の災害時の活動計画を練る

災害図上訓練DIG

DIGの実施方法



DIGによる作成地図の完成イメージ



DIG訓練の実施方法の例

- ①班分けとリーダー、書記を決める。
- ↓
- ②時間配分・記入項目を決める。
- ↓
- ③実施方法を説明する。(10分)
- ↓
- ④地図に透明シートを重ね、シート1には「まちの構造」「防災上安全な場所」を記入し、シート2には「防災上危険な場所」を記入する。(シート1と2で各15~30分程度)
- ↓
- ⑤地域の防災課題を検討する。(10分)
- ↓
- ⑥成果を発表し、防災指導員が講評を行う。

災害図上訓練DIG実施の流れ

事前準備

グループ分け・
役割の決定

時間配分・
記入項目の決定

準備品を揃える

- 1 実施対象の決定
 - 地区住民
 - 実施人数は何人でも可能
- 2 対象人数
 - 1グループ8から10人に班分け
 - 全体の進行役、各グループのリーダーと書記の決定
- 3 時間配分・記入項目の決定
 - 60分から90分程度の時間は必要
 - 実施予定時間によって記入項目を決定



災害図上訓練DIG

DIG訓練当日

実施方法の説明
10分



地図の作成
シート1 15~30分
シート2 15~30分



課題の検討
10分



成果発表
10~15分

1 会場設営

- グループごとに準備品（必要であればテーブル）を用意する。

2 事前説明

- 訓練前に、災害が発生したときの被害のイメージをもってもらおう。

【イメージ写真】

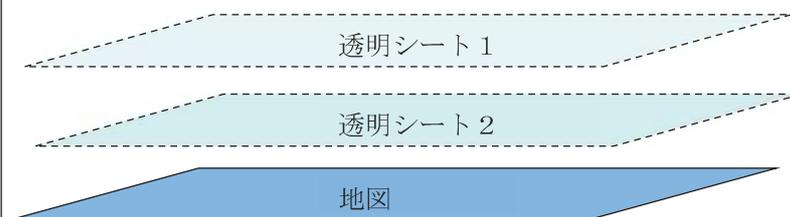


ブロック塀の崩落



自動販売機の転倒

3 地図の作成



【地図の準備イメージ】

●透明シート1への記入事項

「まちの構造」、「防災上の安全な場所」を話し合って記入してください。

まちの構造の確認

種別	色・線種	種別	色・線種
主要道路	赤太線	河川・池等	青太線
耐火建築物	赤太線	鉄道	黒太線
公園・学校等の避難所になる施設・場所	緑太線		

防災上安全な施設・人

種別	色・線種	種別	色・線種
医療機関	黒	公共施設(市役所、消防署、警察等)	名称 黒
ガソリンスタンド	黒	消防器具置場 防災倉庫	消 黒
ホームセンター	黒	AED設置場所	AED 黒
食料品店 コンビニ	黒	区長、自主防災会 長等の自宅	緑

【地図への記入例】

●透明シート2への記入事項

作業をし終わった透明シート1をめくり、新たに透明シート2を被せる。

「防災上の危険な場所」を記入してください。

危険な場所は赤一色にした方が透明シート1との区別がしやすくなります。

防災上危険な場所

種別	色・線種		種別	色・線種	
河川の氾濫危険箇所		赤で網掛け	ブロック塀の多い狭い道路		青太線
土砂災害の恐れがある場所		赤で網掛け	老朽化した木造住宅の密集地		赤で網掛け
危険物の貯蔵庫(ガソリン等)		緑太線	災害時使用できなくなる道路・橋		赤で網掛け
その他危険と思う箇所(自販機の転倒等)		緑太線	災害時助けが必要となる人、施設(※)		赤

(※) 人 : 一人暮らしの高齢者、身体障害者、知的障害者、妊産婦、外国人等
施設 : 老人福祉施設、障害者福祉施設、幼稚園、保育園

！個人情報が含まれるので、記入項目に入れる際は、関係者とよく相談し、取扱いには注意すること

【地図への記入例】

4 課題の検討

- 地図にシート1、シート2を重ね合わせる。
- 以下のポイントを参考にして、付箋に記入し地図に貼る。

【検討する上でのポイント】

- ① 地域の特徴
 - ・ [災害が発生した場合] 危険になる場所はどこか？
 - ・ 安全な避難場所はどこにあるか？
 - ・ 大きな河川、池、幹線道路、重要な施設などはどこにあるか？
- ② 予想される被害や危険な箇所
- ③ 作成した地図を基に、避難誘導の方法や負傷者への対応方法を検討する。
 - ・ どうやって行う？
 - ・ 何人くらいの人が必要？
 - ・ どのくらいの時間がかかりそう？



5 成果の発表

課題の検討を踏まえてまとめた内容を各グループ毎に発表してください。

6 発表内容や訓練成果をまとめ、各種計画やマニュアル、地域防災マップ等に反映する

この訓練を通して得た成果は、地域内の貴重な防災資料です。

DIG訓練を終えて終了ではなく、自主防災組織の防災計画や地域防災マップ等に反映させ、自主防災組織が防災活動を行うための計画作成の資料として活用してください。

情報収集・伝達訓練

5 情報収集・伝達訓練

訓練の目的

- ・地域の被災状況等の情報を正確かつ迅速に収集するための手段を確認する。
- ・収集した情報を集約し、自主防災組織内で正確に共有できるようにする。

準備するもの

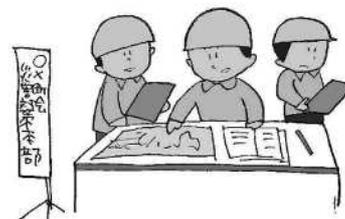
- ラジオ 携帯電話（スマートフォン） メガホン 住宅地図
- 模造紙 付箋 筆記用具 自転車（地域巡回用として）
- 無線機（トランシーバー）



収集が必要な情報とは

自主防災組織が災害時に活動するために必要な情報は、下記のとおりです。

- ① 住民の安否状況
- ② 被害の状況
 - 火災の有無 家屋倒壊の有無 道路やブロック塀等の損壊の有無
 - がけ崩れ等の有無 負傷者等の有無
- ③ ラジオ、テレビ、携帯電話（スマートフォン）等からの災害情報、ライフライン情報



情報収集訓練の実施方法の例

【情報収集訓練】

- ① 情報連絡班長が班員に地域の被災状況の情報収集を指示する。
※必要な情報①、②についての情報を取るよう指示をする。
↓
- ② 班員が地域ごとに情報を収集する。
※次の項目について必ずメモをとる。
 - ・「いつ、どこで、何（誰）が、どうして、どのように」になっているのか
 - ・記録者の名前、日付、時刻↓
- ③ 収集した情報を班長に報告する。
 - ・口頭による速報とメモ等を活用した情報の報告を使い分ける。↓
- ④ 班長は、収集した情報を取りまとめて記録し、自主防災組織の長などへ報告（無線機等の使用も考慮する）し、自主防災組織内で共有を図る。

情報伝達訓練の実施方法の例

【情報伝達訓練】

①情報連絡班長に模擬情報を与える。

※模擬情報の例

「〇時〇分に、〇〇地区に避難指示が発令されたので、〇〇小学校に避難」



②班長が班員に情報伝達を指示する。



③班員が分担して情報伝達する。（地域の連絡網などを活用する。）



④最終的に伝達された情報が、どの程度正確だったかを確認する。

情報収集・伝達訓練の成功のポイント

- ・事実を確認し、時機に適した報告を行う。
- ・伝達は簡単な言葉で行い、難しい言葉を避ける。
- ・口頭だけでなく、メモ程度の文書を渡しておく。
- ・情報を正確に伝達するために、受信者に内容を復唱してもらう。
- ・情報には数字を含むことが多いため、数字の伝達には特に注意する。
- ・「異常なし」も重要な情報である。
- ・定期的な報告を行う。
- ・無線機等の使用も考慮し、迅速な情報収集・伝達を心がける。

【正常化の偏見と情報収集・伝達】

正常化の偏見とは、災害時に、自分の置かれている状況を理解できず、目の前に危険が迫ってくるまで、その危険を認めようとしない心理が働き、「たいしたことはない」と思い込むといった心理現象のことを言います。

こうした心理は、地域の防災活動に大きな障害となりますので、災害が及ぼす危険な状況を、いかに正確な情報として住民に伝えるかが重要となります。

防災情報等の活用

インターネットを活用して、過去の災害の被害状況を調べたり、防災に関する知識を得たりすることもできます。普段から、防災に関するホームページを見て、防災知識を習得しておきましょう。また、総務省消防庁のホームページには、「防災・危機管理eカレッジ」という名称で、防災に関する学習コンテンツがあります。自宅等にいながら気軽に防災知識を得ることができますので参考にしてください。